



高橋 満(たかはし みつる) 整形外科部長
静岡県出身。1980年名古屋大学医学部卒業。99年愛知県がんセンター医長。2002年静岡がんセンター整形外科部長に。骨軟部肉腫の診断から手術、化学療法にわたる分野の国内有数の専門家。また、がんの骨転移を生じた患者さんに対する多職種チーム医療に関して、全国モデルを確立すべく活躍中。

専門医でなければ治療困難

整形外科という、腰や首の痛みを治療する脊椎(せきぎつ)外科、ひざや股関節の痛みを治療する関節外科、運動(運動)帯(じんたい)を伸ばしたり軟骨を痛めたりした人を治療するスポーツ整形を思い浮かべる人が多いと思いますが、ところが、こういう痛みの中に、がんが原因となっていることも決してまれではありません。

静岡がんセンターの整形外科は、がんが原因で起こる背骨や関節の痛み、がんによる筋肉のしこりを専門に治療しています。大きく三つのタイプがあります。骨から発生するものが「骨原発性悪性腫瘍(しゅがん)」、骨原発性悪性腫瘍(しゅがん)が原因で起こる背骨や関節の痛み、がんによる筋肉のしこりを専門に治療しています。

がん患者のメンタルケア

精神腫瘍科は、がんセンターに設置された精神科で、がんでお悩みの方のメンタルケアを診療する科です。がんの臨床においては先が見えにくく、患者にとって、がんの発生が未経験であるということや、一九八一年以降、日本人の死因の第一位を占めた走っていることなど恐れ、感情を持つのは当然です。当センターが実施した八千人近い患者さんのアンケート結果から、半数以上の方が不安や悩みを抱えていたことが分かりました。「先行きが心配」「死ぬのはこわい」などのさまざまな悩みを抱え、不安に伴って、気分が落ち込む、食欲がない、眠れない、疲れやすい、病気になるなどの



小野瀬雅也(おのせ まさなり) 精神腫瘍科医長
1993年金沢大学卒業。横浜市立大学医学部付属病院研修医。95年同精神医学教室入局。単科精神科病院勤務。98年精神保健指定医取得。2000年同医学部付属病院精神神経科助手。03年静岡がんセンター精神腫瘍科、日本総合病院精神科医学会指導医、日本医師会認定産業医。

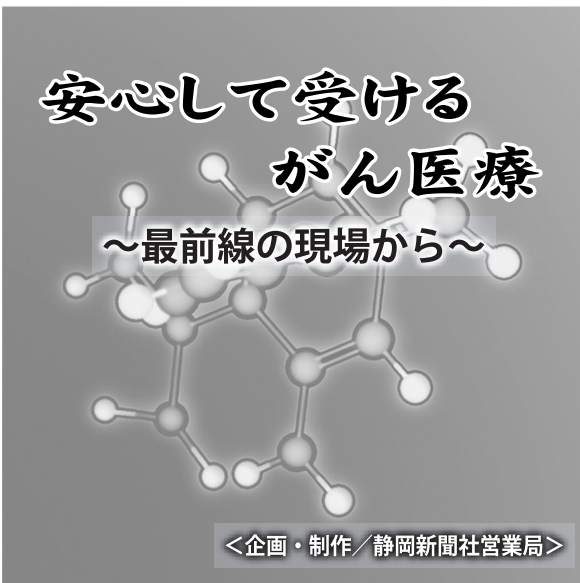
よつ)、結合組織から発生するがん「軟部肉腫」、他の臓器のがんが骨に移った「転移性骨腫瘍」です。内臓や皮膚

整形外科領域のがんと骨転移

整形外科部長 高橋 満氏

若い人に発生する骨肉腫

若い人に発生しやすい腫瘍で、悲劇のドラマに登場する多くの病気です。膝を中心に、太ももの骨の下端や、脛(すね)の骨の上端が最もできやすい部位です。い



がん治療についての最新情報を多角的に学ぶ。県立静岡がんセンター公開講座「安心して受けるがん医療」最前線の現場から」(静岡新聞社・静岡放送主催、同センター共催、スルガ銀行特別協賛、白寿医療学院、ニュー八景園協賛)の第四回講座が、先月十四日、静岡市葵区の静岡市民文化会館で開かれました。同センター整形外科部長の高橋満氏が「整形外科領域のがんと骨転移」、精神腫瘍科医長の小野瀬雅也氏が「不安を覚えたなら、どう対処する?」をテーマに講演しました。その概要を紹介いたします。

若い人に発生しやすい腫瘍で、悲劇のドラマに登場する多くの病気です。膝を中心に、太ももの骨の下端や、脛(すね)の骨の上端が最もできやすい部位です。いなくはならなくなった人も

不安を覚えたなら、どう対処する?

精神腫瘍科医長 小野瀬雅也氏

はすべて自分の責任だなどと。思い悩み、これらの症状が二週間以上続く場合、うつ病と診断されることもあります。一度は落ち込み、自分が不安や緊張に伴って、動悸、息切れ、吐き気、目まいなど

がんの病名告知を受けた後、情報や混乱しがちな考えを整理していくことが必要となります。不安や悩みを一人

病名告知に関して、伝える場合と伝えない場合についての長所、短所に分けてみました。伝えたい場合、納得しながら自分で治療方法を選択する

病名告知のとき、患者さんの心の動揺を理解して、ご家族は気持ちを受けとめる準備をしてください。励ますだけではかえって突き放された感覚に陥る場合もあります。病

進んで早期発見がしやすくなる。がんの治癒率が高まったことから、がんは治るということから、がんは治るという

また、本人とご家族がご一緒に価値を置いて診療を受けるのも重要です。がんの治療を選択する際、効果の強いものにするか、副作用が辛い

一方、デメリットとして告知方法も万策尽き終末段階になって、私の人生とは一体何であったのか、子どもの将来に役立つ何かを伝えられたかなどと思いをめぐらせま

後に残る人が、その人から何を感ず、何を教われるのかを考えると、何が大事ではないかと思えます。

のパンニック障害の症状が出る制が働くこともあります。その後も、苦悩と不安の時期が続くと、逆にそれが不安を生

医療は進歩し検査と治療が。がんの病名告知を受けた後、情報や混乱しがちな考えを整理していくことが必要

また、本人とご家族がご一緒に価値を置いて診療を受けるのも重要です。がんの治療を選択する際、効果の強いものにするか、副作用が辛い

一方、デメリットとして告知方法も万策尽き終末段階になって、私の人生とは一体何であったのか、子どもの将来に役立つ何かを伝えられたかなどと思いをめぐらせま

後に残る人が、その人から何を感ず、何を教われるのかを考えると、何が大事ではないかと思えます。